

高等学校外国語科における論理的思考力を伴う表現力を高める 授業に関する実証的研究

—パラグラフの型で表現するよさに気づかせる取り組みを通して—

藤田 典代*, 金 児 正 史**

(キーワード：言語技術, パラグラフ・ライティング)

1. 問題の所在

高等学校の教育現場での筆者の経験から、生徒にできるだけ多くの知識を教え込む授業形態が依然として主流であることが課題として挙げられる。高学年になればなるほど、生徒の学習に向かう動機が大学受験対策となり、受験を視野に入れた授業形態を望む生徒も多い。このことから、特に大学入試に必要とされる教科・科目においては、教科書の内容把握や練習問題を淡々とこなすなどの知識・技能の習得に重きを置いた授業が展開されている。言い換えれば、生徒が主体的に考えたり、表現する活動はほとんど行われていない。筆者の担当教科である外国語科の教科書には、単元のまとめとして、生徒が自分の考えを話したり書いたりするコミュニケーション活動の内容が設けられているが、その内容は定期考査の範囲に含まれないことが多い。その場合には、授業で時間を取ってコミュニケーション活動をやったとしても生徒のモチベーションも上がらないという理由から、教科書をどんどん進めることを優先している教師が多い。このように、筆者の知る限りでは、高等学校の学習場面では、論理的思考力を伴う表現力を育成する指導が欠如している状況である。

こうした実態を改善するために、さまざまな先行研究や書籍等を研究した。その結果、中央教育審議会答申(2014)や有元(2008)、三森(2013)らの視点に着目した。中央教育審議会(2014)「新しい時代にふさわしい高大接続の実現に向けた高等学校教育、大学教育、大学入学者選抜の一体的改革について～すべての若者が夢や目標を芽吹かせ、未来に花咲かせるために～(答申)」は、高等学校教育において、現状の改善の必要性を指摘している。そこでは、「[高等学校教育が、受験のための教育や学校内に閉じられた同質性の高い教育に終始することになり、多様な個性の伸長や幅広い視野の獲得といった、多様性の観点からは不十分なものとなりがちである。こ

うした教育では、大学入試に必要な知識・技能やそれらを与えられた課題に当てはめて活用する力は向上させられたとしても、自ら課題を発見し解決するために必要な思考力・判断力・表現力等の能力や、主体性を持って、多様な人々と協働しながら学んだ経験を生徒に持たせることはほとんどできない。(p.4, 下線は筆者)」と書かれている。さらに、論理的思考力を伴う表現力の指導を高等学校までに的確に行っておかなければ、「[主体性を持って他者を説得し、多様な人々と協働して新しいことをゼロから立ち上げることのできる、社会の現場を先導するイノベーションの力を、大学において身に付けることは難しい。(p.4, 下線は筆者)」とも指摘している。今の教育の在り方のままでは、多様化の荒波を乗り越えていけるような人材を、我が国から排出することもままならないだろう、と感じた。筆者はこの答申を読んで、これからの高校生に、「自分の考えを伝える、人の意見を聞き取る、情報を的確に選択して読み取る、最適解を協働して見いだす力」を身につけさせなければならないと感じた。

有元(2008)は、その著書の中で、日本人のコミュニケーションが異質であることや、国際的なコミュニケーションを身につけるための「論理的に読んで考えて書く」力を育てる必要性を指摘している。特に、論理的表現の基本は、次の3点であると指摘している。

- 1) 「だれが聞いても納得するような理由と根拠」を挙げて、意見を書くこと
- 2) 意見がふらふらと変わらないで、終始一貫していること
- 3) 意見が飛躍せずに、論理的につながりよく展開すること

このことから筆者は、論理的表現の基本の力を、いかに生徒に身につけさせることができるか、模索しなければいけないと考えた。

筆者はさらに、三森(2013)の、言語技術の指導に着目した。言語技術は、世界の多くの国々で幅広く実施さ

*鳴門教育大学大学院 高度学校教育実践専攻

**鳴門教育大学基礎・臨床系教育部

れている世界基準の言語教育である。三森は言語技術の指導を「発達段階に応じて、情報の取り込み（読むこと・見ること・聞くこと）、思考（批判的・論理的・分析的・多角的・創造的思考など）、表現（話すこと・書くこと）などのスキルを体系的、かつ具体的に指導する」と定義している。筆者は、三森が定義する言語技術を、高等学校外国語科の授業に組み入れて、有元が指摘する論理的表現の基本を高校生に身につけさせなければいけないと考えるようになった。

しかしながら、高等学校外国語科の授業で、三森が提唱する言語技術の指導をすべて行うことは困難である。そこで筆者は、高等学校外国語科の授業で実施可能な言語技術の指導について検討を始めた。そして、「人の意見を的確に聞き取るとともに、自分の考えを的確にまとめて人に伝える」力を身につけるための「パラグラフ・ライティング」の指導を独自に計画した。その指導計画では、自分の考えを伝える方法として、「主張→根拠→結文」というパラグラフの型を提示し、その上で、自分の主張とその根拠を、パラグラフの型に沿って組み立てる指導をすることにした。さらに、母語を育てる観点から、日本語を用いて授業を行うことにした。母語である日本語を用いた指導を行った理由は2つある。1つめは、生徒の英語力に限界があるからである。一般的な高校生は、語彙や文法の獲得が不十分なため、英語で自分の考えを表現しようとする、どうしても表現できる能力に制限がかかる可能性が高い。そのことによって、生徒が伝えたい内容を十分に表現することが困難な場合が多い。2つめは、母語が外国語の能力の土台であるからである。まずは、我が国のほとんどの生徒にとっての母語である日本語を用いて、自らの考えを論理的に、かつ説得力をもった言葉で表現する能力を育成することが、外国語で表現する能力の向上にもつながると考えた。

2. 研究の目的

本研究の目的は以下の2つである。

- 1) 生徒が「人の意見を的確に聞き取るとともに、自分の考えを的確にまとめて人に伝える」力を身につけるための「パラグラフ・ライティング」の授業を実践する。
- 2) 生徒が「人の意見を的確に聞き取るとともに、自分の考えを的確にまとめて人に伝える」力を身につけるために、この授業が有用な一方策であることを実証的に検証する。

3. 本研究の方法

本研究は、次の1)～5)の手順で進めた。

1) 先行研究の調査

高校生に「自分の考えを伝える、人の意見を聞き取る、情報を的確に選択して読み取る、最適解を協働して見いだす力」を身につけるため、どのような指導が有用か、先行研究を調査した。

2) 学習指導案の作成

先行研究を参考にして、「人の意見を的確に聞き取るとともに、自分の考えを的確にまとめて人に伝える」力を身につけるために「パラグラフ・ライティング」を題材とした授業の学習指導案を作成した。その際、三森(2013)が提唱する言語技術の指導を参考にし、高校1年生を対象とする、3時間の学習指導計画を立てた。

3) 表現力調査問題の作成

この授業の成果をとらえるための評価問題を作成した(以下、表現力調査問題)。表現力調査問題は、特に生徒の表現力をとらえることを主眼に据えた。表現力調査は、本研究の対象生徒全員に、書く能力を図る「ライティング・テスト」を事前・事中・事後の3回実施した。本研究の対象生徒は高等学校1年生80名(国際英語科1クラス、普通科1クラス)である。

4) 授業の実践

作成した学習指導案に沿って、授業を実施した。授業における生徒の活動の様子を把握するために、ビデオとICレコーダーを利用して記録した。

5) 授業の分析と考察

授業後に生徒の活動記録や、使用したハンドアウト、授業の振り返り、および事前・事中・事後調査の分析を行い、本研究の目的が達成できたか考察した。

4. 本授業の概要

本授業の学習活動の概要は表1の通りである。

表1 本授業の学習活動

		主な学習活動
パラグラフ・スピーキング(問答ゲーム)	第1次	(1) 日本人の会話における問題点を認識する。 (2) 問答ゲームのルールを意識しながら、自分の意見を、その理由とともに主張する。 (3) 他の生徒の発表内容に対して質問や意見を述べる。 (4) 必要があれば言い直しをする。
パラグラフ・ライティング	第2次 第1時	(1) パラグラフの型と効果的な文章を書くための条件を理解する。 (2) パラグラフの型を意識しながら、簡潔でわかりやすい論理的な文章を書く。
	第2次 第2時	(3) 他の生徒が書いた文章について、論理的なパラグラフの型で表現しているか判断し、コメントを書く。 (4) 他者の意見を活用しながら、パラグラフの型を用いて自分の文章を書き直す。

3時間の授業のうち、第1次がパラグラフ・スピーキング、第2次がパラグラフ・ライティングの指導である。主な学習活動からわかるように、パラグラフ・スピーキングとパラグラフ・ライティングの学習活動は連動しており、「話すこと」と「書くこと」の違いがあるだけで、ねらいは同様である。本研究ではパラグラフ・ライティングに焦点を当てるため、第2次についての指導の概要を以下に示す。

実施時期 平成28年9月

対象生徒 徳島県立高等学校1年生80名

4. 1 第2次第1時の概要

1) 母語を用いて書く力を向上させる意義の説明

授業の始めに、今回の授業は、母語である日本語を用いて、自らの考えを論理的に、かつ説得力をもった言葉で表現する能力を育成することがねらいであると伝えた。さらに、意見を持つこと自体を重視し、相手を説得する内容を、日本語で表現することを意識するように、生徒に指示した。

2) 効果的なパラグラフの型の確認

生徒に、2つの文章が印刷されているハンドアウトを配布した(図1)。各自で2つの文章を黙読した後、その2つの文章について、主張が明確になっているのはどちらなのか、またなぜそう思ったのかについての理由をグループで話し合った。その後、話し合いの結果をクラスで共有した。

<p>①バオバブは多目的に使われる木である。西アフリカでは、幹の下の樹皮がはがれたバオバブの木をよく見かけるが、これは現地の人たちがバオバブの皮をはいでロープにしているためである。またバオバブの葉は食用となり、緑色のソースを作るのに使われている。そして実はビタミンCが豊富で、種子の周りについた部分を水に溶かし、砂糖を加えた飲み物が売られている。このように、バオバブは様々な形で使われている。</p>	<p>②バオバブはアフリカ大陸には1種類だけが分布しているが、マダガスカルにはさらに7種、そしてオーストラリアには2種が分布している。バオバブの不思議な形はあちらこちらで神話や伝説を生み、サン＝テグジュペリの有名な小説「星の王子様」にも登場する。そしてバオバブは樹皮がロープに、葉は野菜として、そして実は飲料に用いられている。</p>
--	---

図1 バオバブに関する文章①と②

3) 「パラグラフの型」の説明

論文やレポートにおけるパラグラフは、「ひとつのアイデアを示す」単位であり、「パラグラフ・ライティング」

は「問答ゲーム」で学習した形式を文章で記述する方法であることを伝えた。そして、パラグラフの型(トピック・センテンス(主張)、サポーティング・センテンス(根拠)、コンクルーディング・センテンス(結文))や、パラグラフ・ライティングにおけるルールを説明した。

4) パラグラフの型に沿って書く演習

「ハンドアウト③:あなたは徳島が好きですか。」を全生徒に配布し、実際に、「パラグラフ・ライティング」を行った。パラグラフの型を意識して書くことを確認した。

5) 本時の振り返りと次回の授業までの指示

本時の活動は「パラグラフ・ライティング」と言われるもので、日本語であっても英語であっても、自分の意見を主張する際にパラグラフの型を使うと、相手がとても理解しやすくなることを確認した。その後、次回の授業までに、生徒が行う作業について説明した。パラグラフ・ライティングを終えた生徒は、ハンドアウト③を回収用封筒に入れて回収箱に提出すること、回収したのちにグループメンバーのパラグラフが配布され、そのパラグラフに対してコメントを書き、再び提出することを指示して、本時の授業を終えた。

4. 2 第2次第2時の概要

1) 前時の振り返り

授業の始めに、前時に学習したパラグラフの型とパラグラフ・ライティングにおけるルールを、生徒に確認した。また、パラグラフの型は大型印刷をして黒板に掲示し、生徒の理解を確かにするよう工夫した。

2) 前時の課題パラグラフの考察

前回の授業で書いてもらった「あなたは徳島が好きですか。」について、その原本と、グループメンバー3人からのコメントを返却した。生徒たちは、グループメンバーからのコメントを黙読した。その後、疑問点があれば、メンバーに質問するように指示した。

3) メンバーのコメントを読んだ感想のシェアリング

各生徒がグループメンバーからコメントをもらった感想について、グループでシェアリングした。その際には、自分が書いたパラグラフが相手に伝わった喜びを感じている生徒が多かった。グループでのシェアリング後に、話し合った内容をクラスでシェアリングした。「説明不足やまとめ方に矛盾があることが分かった。」「理由をいっぱい書きすぎていた。もっと絞ればよかった。」という意見が出た。

本時の書く活動に移る前に、筆者から、全般的な、書く際のアドバイスをした。具体的には、「私たちは徳島県民なので、阿波踊りは楽しいとわかるが、他県の人に伝える時にどう楽しいのか説明するべきである。」「徳島には便利な施設がないという意見も、具体的にどういった施設が足りないのか説明が必要である。」など、伝える相

手を意識して具体的に書くように注意を促した。

4) パラグラフの型に沿って書く演習

「ハンドアウト④:学校で宿題が全く出ないことに賛成ですか、反対ですか?」を配布し、生徒が実際にパラグラフを書いた。パラグラフの型を意識するとともに、反対意見の人を説得するつもりで書くように注意を促した。さらに、「主語を意識する」ことにも注意を払って書くように伝えた。

5) 互いのパラグラフを読んでコメント記入

10分間の「パラグラフ・ライティング」の後、グループでハンドアウトを交換し、互いのパラグラフを読んで、コメントを書いた。

6) コメントを基に書き直すこと

生徒のパラグラフの質を上げるため、グループメンバーからのコメントを基に、書き直しを指示した。中には、グループメンバーから改善点の指摘がない生徒もいたが、その場合には筆者が改善点を指摘した。書き直しの作業をしている間にも、テーマについて熱く意見を交わすグループが見られた。さらに、その議論は他のグループを巻き込んで、熱い議論が展開されていた。

7) 本授業の振り返り

「パラグラフ・ライティング」の授業を受けての感想を、生徒に問いかけた。生徒は、読み手に自分の考えを明確に伝えるときに、どう書けばいいのかを他者の意見を聞きながら学んでいた。授業の感想を求めたところ、1生徒が「アドバイスをもらってこういう風には書けばいいんだなとわかった。」と発言した。

授業のまとめとして、筆者から、日本語であっても英語であっても、自分の意見や主張を伝える際に、パラグラフの型を用いると、主張したい内容を頭の中で整理して的確に書いたり話したりすることができることや、読み手や聞き手に自分の主張を容易に理解してもらえることを伝えた。さらに、今回学んだ「パラグラフ・ライティング」は、他の授業や大学入試、さらに社会人になっても必要な技能なので、今後はパラグラフの型を意識して、意見を書いたり話してほしいと伝えた。

5. 本研究の分析

事前 (第1次前)・事中 (第2次前)・事後 (第2次後) に実施した表現力調査を基に、本授業のパラグラフ・ライティングの変容を分析した。そのうち、本研究が着目した調査問題は、「イギリスの友人にメールで『日本を訪れるとしたら夏と冬のどちらがよいか』質問され、生徒がこの友人にメールで返事を書く」という設定で、生徒の返信の文面を通して、英語で自分の考えを書くものである (図2)。分析の視点は、どの程度的確に「パラグラフの型」で書くことができているかをとらえることであ

る。生徒の回答については、「パラグラフの型 (1, 2, 3 で分類)」「根拠が事実に基づいているか (A, B, C で分類)」「サポーティング・センテンスの数 (ア, イで分類)」の3つの観点から回答類型を分類し、クロス集計を行った (図3)。

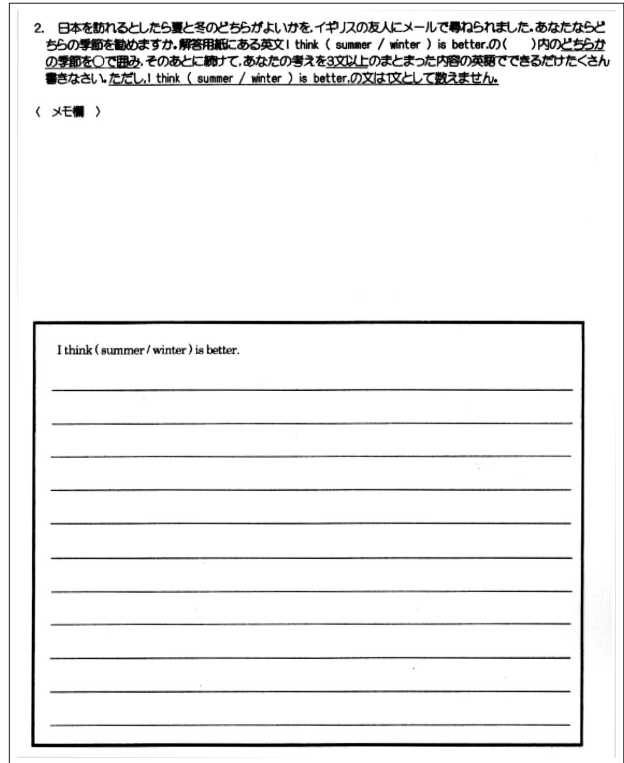


図2 ライティングテスト

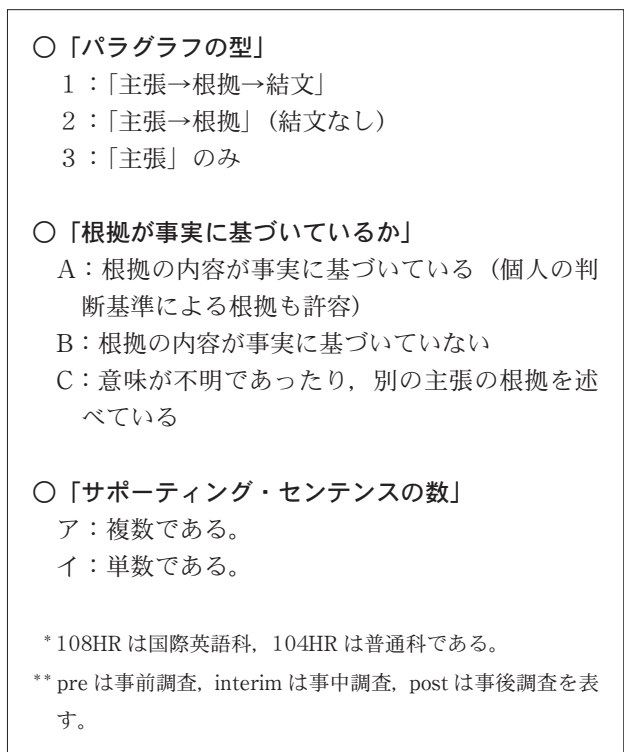


図3 集計の便覧

集計結果は以下のとおりである(表2, 3)。この調査では、最も確かなパラグラフ・ライティングは「1 Aア」なので、事中調査、あるいは事後調査でこれらの増加が望ましいと考えた。

表2 クラス集計表(国際英語科)

表現力調査(Writing:英語)集計結果まとめ108HR

Pre

1A7	1A1	1B7	1B1	1C7	1C1	2A7	2A1	2B7	2B1	2C7	2C1	3A7	3A1	3B7	3B1	3C7	3C1	計
19	0	0	0	0	0	20	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	40
19 (47.5%)						21 (52.5%)						0 (0%)						40

Interim

1A7	1A1	1B7	1B1	1C7	1C1	2A7	2A1	2B7	2B1	2C7	2C1	3A7	3A1	3B7	3B1	3C7	3C1	計
27	0	0	0	0	0	12	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	39
27 (69.2%)						12 (30.8%)						0 (0%)						39

Post

1A7	1A1	1B7	1B1	1C7	1C1	2A7	2A1	2B7	2B1	2C7	2C1	3A7	3A1	3B7	3B1	3C7	3C1	計
25	0	0	0	0	0	10	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	36
25 (69.4%)						11 (30.6%)						0 (0%)						36

表3 クラス集計表(普通科)

表現力調査(Writing:英語)集計結果まとめ104HR

Pre

1A7	1A1	1B7	1B1	1C7	1C1	2A7	2A1	2B7	2B1	2C7	2C1	3A7	3A1	3B7	3B1	3C7	3C1	計
12	0	1	0	0	0	20	0	0	0	5	0	0	0	0	0	0	0	38
13 (34.2%)						25 (65.8%)						0 (0%)						38

Interim

1A7	1A1	1B7	1B1	1C7	1C1	2A7	2A1	2B7	2B1	2C7	2C1	3A7	3A1	3B7	3B1	3C7	3C1	計
14	0	0	0	1	0	18	0	0	0	5	0	0	0	0	0	0	0	38
15 (39.5%)						23 (60.5%)						0 (0%)						38

Post

1A7	1A1	1B7	1B1	1C7	1C1	2A7	2A1	2B7	2B1	2C7	2C1	3A7	3A1	3B7	3B1	3C7	3C1	計
16	0	0	0	1	0	16	2	1	1	2	0	0	0	0	0	0	0	39
17 (43.6%)						22 (56.4%)						0 (0%)						39

この調査結果から、「1 Aア」の生徒は、国際英語科では事前・事中・事後調査の割合がそれぞれ47.5%、69.2%、69.4%だった。また普通科では事前・事中・事後調査の割合がそれぞれ31.6%、36.8%、41.0%だった。2時間のパラグラフ・ライティングの授業だったが、「1 Aア」の生徒が増加している傾向にある。しかし、その増加の傾向に関しては、国際英語科と普通科に違いが見られた。国際英語科においては、事中調査の時点でパラグラフの型を意識して書くことができるようになった生徒が大幅に増加した。その一方で、普通科では、事中・事後を経て段階的に増えていった。この違いについて、

現有の一次資料から考えてみた時、国際英語科については、問答ゲームを取り上げたスピーキングの授業が、パラグラフ・ライティングに有効に作用したことが推測できる。しかしながら、普通科でこうした効果が見られないことについては、その理由が思い当たらなかった。

さらに、パラグラフ・ライティングの2時間の授業の実施間隔にも違いがあった。パラグラフ・ライティングを扱った第2次第1時と第2次第2時の授業の間隔が、国際英語科では2日しか空いてなかったが、普通科は6日空いていた。普通科の場合、授業の間隔があきすぎたため、パラグラフの型が定着しなかったことが、「1 Aア」の生徒が増加しなかった要因の1つではないかと考えた。しかしながら、国際英語科では事中調査から事後調査にかけて大きく変容が見られていないことは説明しきれない。

そのうえで、筆者はさらに、個別の生徒の反応に着目し、特に生徒A～Dの反応の様子に着目した。また、生徒Cと生徒Dについては、調査問題の回答記述を示すが、英単語の誤記などは原文のまま示す。

生徒Aは、事前が「2 Aア」56語、事が「1 Aア」77語、事後が「1 Aア」76語の生徒である。本授業の成果が的確に出ているケースととらえた一人である。生徒Aの事前・事中・事後調査におけるライティングの主張内容は大きく変わっていないが、事中・事後調査では、語数の増加も見られる。また、事中・事後調査では、いずれも的確にパラグラフの型で述べられており、根拠を示す際にも、理由が2つあることを述べたうえで、「first」、「second」といった語を用いて明確な理由の提示をしている。さらに、事後調査における回答内容は、事中調査における回答内容より、さらに語彙や表現が充実しているとともに、イギリスとは違った暑い夏を体験できるということも主張している。読み手が書き手の主張を理解しやすい構成となっていて、パラグラフの質が向上していると判断した。

生徒Bは、事前が「1 Aア」32語、事が「2 Aア」73語、事後が「2 Aア」65語の生徒である。事前調査で「1 Aア」であったが、事中・事後調査ではともに「2 Aア」と悪化している。「パラグラフの型」の視点から見ると、事前調査では、生徒Bは的確にパラグラフの型に沿って書いていた。ところが事中・事後調査では明確な結論が書かれておらず、正確なパラグラフの型になっていない。しかしその内容を分析すると、事中・事後調査では、結論が書けていないだけで、それ以外の部分について事前調査と比較すると、他者を意識して伝えやすくしようとした内容になっていることが明らかになった。

生徒Cの調査問題の回答を原文のまま図4に示す。

生徒Cは、事前調査で「2 Aイ」であったが、事中調

事前「2 A イ」12語	事中「1 A ア」47語	事後「2 A ア」62語
We can eat Japanese food which can't eat in summer. For example,	Japan winter is too cold to siteseen. It will be difficult to go out. But in summer, we can go sea, mountain, and anywhere not so difficult. You can see many nature and feel Japanese culture than winter. So, I think you should come Japan in summer.	There are many nice places where you should visit during the summer in Japan. For example, sea, mountains and terma parks. There are a lot of beautiful nature in sea or mountains and many termaparks like disnyland prevent the special events. Japan has a lot of festival and these are prevented in summer. You can enjoy some traditional and fun things.

図4 生徒Cの反応

査では「1 A ア」, 事後調査では「2 A ア」と、「パラグラフの型」が安定していない。事前調査では、書き終わっていないので、パラグラフの型が不完全となり、説明も十分でない。事中調査では、劇的な改善が見られ、的確なパラグラフの型で書いている。ところが、事後調査では内容の質が向上したものの、「パラグラフの型」の

結論が書けていない。このように、「パラグラフの型」については不安定であるが、内容の向上が見られた生徒である。

生徒Dの調査問題の回答を原文のまま図5に示す。

調査を重ねるにつれて、生徒Dのように、語数は減っていても、主張は明確で、的確になっている生徒が多かつ

事前「1 A ア」80語	事中「1 A ア」64語	事後「1 A ア」60語
We have a festival in Tokushima in summer. It's called Awaodori! We can dance "Awaodori" as a member of Awaodori's "Ren." Ren means team in English. It is very fun for us to dance Awaodori. And, we can eat wataame, kakigori, hashimaki and so on. They are traditional Japanese food! They are very delicious ♡♡ You should eat them! Let's eat them together! Therefor, I think summer is better to visit Japan. I'm looking forward to you come to Japan.	We can go to Awa dance festival in Tokushima. Awa dance called Awaodori in Japanese. There are a lot of dance groups which called Ren. Dancing Awaodori is very fun! Usually, dancer belong to a Ren, but we can dance Awaodori together. And, we can wear beautiful Yukata. Yukata is traditional Japanese dress. So I think summer is better. Let's go to Awaodori together!!	We have a lot of festival such as Awaodori, Hanabi fes and so on. We can see hanabi in the festival. Hanabi means fireworks. I think that Japan has the best technology of Hanabi! They are very beautiful. Also, Hanabi has many forms such as heart, star and like waterfall. You should see Hanabi in Japan! So I recomend summer.

図5 生徒Dの反応

た。本授業を通して、生徒は必要あるいは不要な情報の判別ができるようになり、余分な情報をそぎ落とすことができるようになったことが要因ではないかと感じた。このことは、生徒Dが、パラグラフ・ライティングの授業の振り返りで、次のような感想を記述していることから裏付けられる(図6)。

パラグラフの型を意識して書く指導は、2時間しか実施しなかったにもかかわらず、多くの生徒がパラグラフの型を意識して書けるようになった。すべての生徒の変容をとらえていく過程で、非常に多くの生徒の記述から、内容的な質の向上が読み取れ、パラグラフの型を意識し

言いたいことがまとまり、自分でも何が言いたいのかわかりやすくなる。
言わなくていいことも分かってきて強い意見になる。

図6 パラグラフの型で表現することのよさの回答

て書く指導が、その型を用いて書けるようになる触媒として機能していたことが、明らかになった。

6. 本研究の考察

本研究では触れていないが、第1次のスピーキングの指導の成果を図るために、スピーキング・テストを行った。ライティング・テストにおいて、パラグラフの型が定着し、相手を意識して伝えようとする表現力は上がったという分析結果が得られたものの、スピーキング・テストの方が、高い成果が得られた。表現する語数が増えると結論を書き忘れる傾向があるという分析結果が、スピーキング、ライティングともに共通する。しかし、この傾向は、ライティングの方が強い。このことから、パラグラフの型の定着は、ライティングの方が難しい可能性があり、本授業の2時間だけでは指導時間が十分でなかったことが考えられる。

一方、筆者は、生徒の変容を引き起こす1つの要因として、バオバブの木に関する2種類の文章(図1)や、駅弁に関する2種類の文章を比較し、主張がわかりやすい文章はどちらか、それはなぜなのか、グループで議論したことがあるのではないかと考えた。バオバブの木のグループ議論では、どちらの文章が読み手に伝わるのか、さまざまな視点から検討している生徒の様子が見て取れた。そして、教室での意見交換を通して、主張が明確であることの必要性や、パラグラフの型になっている方が伝わりやすいことが共通理解されていた。共通理解されたこれらの事柄は、その後の、駅弁の包装紙に関する議論の中では、当然の視点として活用されていた。このことから、生徒が主体的に、よりよい表現を追求していく学習活動が、各生徒の英文によるライティングの表現においても有効に働いたのではないかと考えた。

これらの分析結果から、本授業で取り入れた「パラグラフ・ライティング」の活動は、我が国の子どもたちの英語力のうち、特に「書くこと」における課題を解決する一方策として有効であり、特に、外国語で自分の考えを明確に主張する能力を向上させる可能性も高い。さらに、本授業の成果は次の3つにまとめられる。

- 1) 2時間という限られた授業時間で、「パラグラフ・ライティング」の言語活動を通し、ほとんどの生徒が、「伝える相手を意識しながら、自分の考えを日本語で明確に主張できるようになったこと
- 2) 「パラグラフ・ライティング」の言語活動を経て、自分の考えを、英語で明確に主張する力に大きな変容が見られたこと
- 3) 「パラグラフ・ライティング」の言語活動を通して、パラグラフの型を使えば、自分の考えを明確に表現できると実感した生徒が多くいたこと

以上の成果より、「パラグラフの型」の指導は、生徒自身の考えを明確に主張する能力を向上させる効果が高いことが明らかになった。

一方、第2次のライティングの指導は、第1次のスピーキングほどの劇的な変容をもたらさなかった。2時間行ったライティングの指導であったが、スピーキングほどの反応を見せなかったことは、生徒たちが英語で自分の考えを書く機会が少ないことが大きな要因だと、筆者は考えた。これは英語で書く力だけの問題ではない。筆者は、我が国の子どもたちは、日本語を使って、自分の考えを表現する場面が日常的に与えられていないのではないかと考えた。もしも我が国の子どもたちに、こうした機会が十分与えられてきたとすれば、子どもたちの表現力が劣っているはずがないことは明らかなのではないだろうか。人の話を聞いて、ただ「面白かった」「すごいと思った」だけでなく、「どういうところが面白いのか」「どういうところがすごいと感じたのか」を表現できるようになれば、根拠とともに自分の考えを明確に伝えることにつながると筆者は考えている。

7. おわりに

今後は、本研究の実践を高等学校外国語科の授業でさらに実践するとともに、新たな実践結果を精査し、パラグラフの型を用いて自分の意見を表現できることは汎用的能力であることを明らかにしていきたい。さらに、生徒が自分の考えを深め、その考えを明確に伝えることができるような場面提供や授業設計を、全教科・科目において、教師が協働して実施していくことまで目指したい。そのためにまず、外国語科で実践し、できるだけ多くの先生方に参観してもらい、パラグラフ・ライティングの指導のよさや有用性に気づいてもらうことから始めたい。このことで、論理的な表現力の育成が、高校生の汎用的な能力の育成として必要であることを、先生方に理解してもらおう。そうすれば、論理的な表現をする経験が、全教科・科目における教育のあらゆる場面で活用されることが期待される。

その上で、論理的な表現力育成プログラムを、教育課程の中に位置づける。例えば、総合的な学習の時間を活用することを、先生方に共通理解してもらうことは、方策の1つである。総合的な学習の時間の1つのパッケージとして成立すれば、高等学校1年生の中に落とし込みたい。なお、総合的な学習の時間として考える授業の全体像も示しておく(表4)。

各学期に3時間程度の時間を設定して、「話す・読む・書く」に焦点を当てた、パラグラフ・ライティングを主体とする指導計画である。題材の選び方によっては、各教科・科目での実践も可能であるが、教育課程に組み込む枠組みとして、表4のような考え方を、各高等学校で共有できたらよいのではないかと考えている。

この指導計画は、あくまでも言語技術を習得するため

表 4 論理的な表現力育成プログラムの指導計画案

時間数	指導概要	教材
1 時間	「話す」(型の定着: 問答ゲーム)	問答ゲームの話題
2 時間	「書く」(型の定着: パラグラフ・ライティング) (本授業)	本授業の教材を流用
3 時間	「読む・話す・書く」(相手の考えを読み解く: 新聞記事, スピーチを利用して)	新聞記事などのトピックなど
3 時間	「書く・話す」(相手を説得する文章を書く: 身近な事例を基に)	身近なトピックなど

の導入部分である。こうした言語技術を習得した先には、テキスト分析におけるクリティカル・シンキング、視点を変えて捉えなおすこと、要約などの技能習得も可能となる。これらは高等学校2年生以上で設定することができるようになるだろう。そうすれば、その後の2年間の教育の中で活かすことができるとともに、大学入試における小論文や面接試験、就職試験における面接の指導に有効に機能することになるだろう。また、生徒にとっては、将来、社会人になった時にも、この資質・能力が活用できるだろう。様々な事柄に対して、自ら考え、周りの人と議論し合いながら自己を高めていくことのできる日本人を、少なくとも高等学校教育の段階で育成しなければならないと考えている。

我が国の課題を改善し、生徒が生き抜くための資質・能力を身につけるような教育の一端として、筆者は表現力育成指導に注目して、今後も実践を重ねていきたい。

引用・参考文献

- 有元秀文 (2008) 『必ず「PISA 型読解力」が育つ七つの授業改革－「読解表現力」と「クリティカル・リーディング」を育てる方法－』 明治図書
- 倉島保美 (2012) 『論理が伝わる世界標準の「書く技術」パラグラフ・ライティング入門』 講談社
- P. グリフィン, B. マクゴー, E. ケア 編; 三宅なほみ 監訳; 益川弘如, 望月俊男 編訳 (2014) 『21 世紀型スキル 学びと評価の新たなかたち』 北大路書房
- 高大接続システム改革会議 (2016) 「高大接続システム改革会議「最終報告」」 Retrieved from http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2016/06/02/1369232_01_2.pdf (2017/3/12)
- 三森ゆりか (2003) 『外国語を身につけるための日本語レッスン』 白水社
- 三森ゆりか (2013) 『大学生・社会人のための言語技術トレーニング』 大修館書店
- 中央教育審議会 (2014) 「新しい時代にふさわしい高大接続の実現に向けた高等学校教育, 大学教育, 大学入

学者選抜の一体的改革について～すべての若者が夢や目標を芽吹かせ、未来に花咲かせるために～(答申) Retrieved from

http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/_icsFiles/afieldfile/2015/01/14/1354191.pdf (2017/ 3 /12)

中央教育審議会 (2016) 「次期学習指導要領等に向けたこれまでの審議のまとめ」 Retrieved from

http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2016/09/09/1377021_1_1_11_1.pdf (2017/ 3 /12)

文化審議会答申 (2004) 「これからの時代に求められる国語力について」 Retrieved from

http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/bunka/toushin/04020301.htm (2017/ 3 /12)

溝上慎一 (2014) 『アクティブラーニングと教授学習パラダイムの転換』 東信堂

文部科学省 (2003) 「『英語が使える日本人』の育成のための行動計画」 Retrieved from

<http://e-jes.org/03033102.pdf> (2017/ 3 /12)

文部科学省 (2009) 『高等学校学習指導要領解説外国語編・英語編』 開隆堂

文部科学省 (2015) 「平成 26 年度英語教育改善のための英語力調査事業報告書」 Retrieved from

http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsFiles/afieldfile/2015/05/26/1358071_03_2.pdf (2017/ 3 /12)

「小論文・レポートの書き方 文章の構造を学べば、小論文は完ぺき!」 Retrieved from

<http://shouronbun.com/paragraph1.html> (2016/ 8 /01)